似非唯物論者だって死を考える

縞　重　広

医療関係の大学にいる孫から、ガイドに沿ったインタビューに答えてほしいとメールがあった。内容は、医療従事者を目指す学生が、お年寄り（祖父母世代）に対して、「死の意識を知るためにインタビューを行う」というもので、題目が「祖父母世代の死生観を聴く」。一言で「死」とは何かを答えよとのこと。医療関係の大学でどんなことを学んでいるのか、私なんかには想像できないが、考えてみれば、医療従事者は日常的に「死」と直面する現場にいるわけで、「死」と対峙するこころがまえを修養する目的でのカリキュラムなのだろうか。一応、孫には、こたえをメールで送ったが、あらためて「死とは何か」を考えるきっかけを与えられ、ちょっと戸惑いながらも考えてしまった。死について深く考えたことなんかない。そこでこの機会に、思いつき程度になるかも知れないが、少し「死」について思い巡らしてみた。

生きているかぎり死は逃れられない。すべての生物は、いつかは死ぬ。そんなことは分かり切ったことだと、そこで思考が止まり死について深く考えない。忙しい毎日に追われ、生きることに精一杯のなか、死のことを考える余裕もない。また、考えなくてもすむ。自分以外の他人の死はたくさん経験するし、死んだ人の人生を顧みることはあるにしても、自分の死について考えることはない。行く手に待ち受けているのはわかっているが、深刻に考えない。生きることが大事だと、死を避けている。死から逃げ回っている。それでいいのか、いつかは来る死の心構えは必要ないのか。

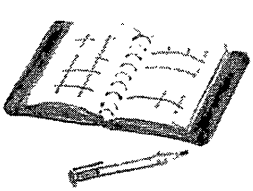
私は、自称「唯物論者」だと思っているの

だが、曹洞宗のお寺の檀家で、家にある仏様や神様、外では寺参りや神社参詣で手を合わせる。願い事をする行為は大切な人としての習俗だと思っている。風呂に入れば、家族の健康と幸せを願い、手を合わせる。これらはすべて宗教行為だ。だから、私の場合は「二セ唯物論者」だろう。霊魂の不滅は信じない。あの世も、三途の川も信じない。世間的な「習俗」として「宗教行為」はするが、第六感や吉凶を信じてはいない。大安、仏滅などは信じていないし、気にしない。縁起はかつがない。生死に関する言い伝えも作り話だと思っている。死の予兆、カラスが家の屋根で鳴くとその家の人が亡くなる、寺の檀家の女性が亡くなると寺のお勝手から皿を洗う音がする、檀家が亡くなると寺の鈴が鳴る。そうしたことはすべてウソで怪談話の一種だと思う。日の吉凶を判断する考えはない。日々の生活のなかで六曜の大安、友引、仏滅などを気にすることはない。お見舞い、手術日の日、結婚式などは縁起のよい「大安」を選ぶなんて考えない。葬式は不吉な「仏滅」を避けるなど考えたこともない。無信仰だし、唯物論も学習した気でいるし、だから日和見的だが唯物論者だと思っている。

火葬場に行き、骨になり、塵芥に肉体がなくなっても、魂は永遠に生きのびて、「千の風」になるなんて、現代人の何割の人々が信じているだろうか。死んだら天国に行き、愛する亡くなった人々と再会できるなんていう神話を信じる人は、現代では少数になったのではないか。そのとき、私のような「二セ唯物論者」「日和見的無信仰者」が増え、幅をきかせる。日常生活では、なんとなく宗教行為を持ち込み安心し、死はできる限り考えず、宗教者や神話を信じるひとびとを嘲笑する。しかし、唯物論者だって、死を迎え、その瞬間、死と直面する。唯物論者は神仏には頼れない。死との対面も、たぶん、いい加減な妥協ではすまなくなるのではないか、という不安がかすめる。

エンゲルスは「生きることは死ぬことであ

にいがた
北から南から

る」という。心と死は相反するもの、切り離された別個のものではなく、生は死を内包し、死なしには成立しないと言う。「これがいったんわかってしまった人々には、霊魂の不滅についてのおしゃべりはすっかりかたづいてしまったのである。死とは生物の身体の解体であって、この身体が死によってそれ自身の実質をかたちづくっていた科学的成分のほかになにひとつあとには残さないということであるのか、それとも死とは、多かれ少なかれ霊魂といったような生の原理、人間のみならず生をもつあらゆる生物よりもあとまで生きながらえるなんらかの生の原理をあとに残すことであるのかのいずれかである。ここではだから弁証法によって生と死の本性が明らかになるというだけのことで、大昔からの迷信をとりのぞくには十分なのである。生きるとは死ぬことである」（エンゲルス『自然の弁証法』大内兵衛・細川嘉六訳、「マルクス＝エンゲルス全集第20巻　大月書店）」。まあ、これで死にのぞむ問題が解決したとは思われない。生きている以上いつかは死と向き合わなければならない。昔なら宗教に頼れた。「自然崇拝」が古代からつい最近までひろく広まっていた時代とは違う。科学が定着し、宗教が入り込む余地がいっそう狭くなってきている。しかし、安楽死や尊厳死に関心があつまるいま、唯物論者だって、死を曖昧に捉えてはまずい時代になっている。

（しま　しげひろ・日本民主主義文学会新潟支部会員）